

成人看護学演習におけるマルチメディア教材の開発 (1) : 看護系大学における学内演習の実態

著者	加藤 光寶, 深澤 佳代子, 小林 優子, 直成 洋子, 酒井 禎子, 山田 正実, 西脇 洋子, 山元 智穂, 上原 美樹
雑誌名	学長特別研究費研究報告書
巻	14
ページ	15-18
発行年	2003-06
その他のタイトル	Cultivation Multi-Media Teaching Materials on Adult Care Nursing Practicum (Part 1) : The actual circumstances about nursing practicum in nursing colleges in Japan
URL	http://hdl.handle.net/10631/475

新潟県立看護大学学長特別研究費 平成 14 年度 研究報告

成人看護学演習におけるマルチメディア教材の開発 (1)
—看護系大学における学内演習の実態—

研究者 (研究代表者) 加藤光寶¹⁾
共同研究者 深澤佳代子²⁾, 小林優子²⁾, 直成洋子¹⁾, 酒井禎子¹⁾
山田正実²⁾, 西脇洋子¹⁾, 山元智穂¹⁾, 上原美樹²⁾
新潟県立看護大学 (成人看護学 I)¹⁾, (成人看護学 II)²⁾

Cultivation Multi-Media Teaching Materials on Adult Care Nursing Practicum (Part 1)
: The actual circumstances about nursing practicum in nursing colleges in Japan

Mitsuho Kato, Kayoko Fukasawa, Yuko Kobayashi, Yoko Sugunari, Yoshiko Sakai,
Masami Yamada, Yoko Nishiwaki, Chiho Yamamoto, Miki Uehara
Niigata College of Nursing

キーワード: マルチメディア教材(multi-media teaching materials), 成人看護学(adult care nursing),
演習(nursing practicum)

目的

成人看護学の学内演習は臨床実習にいたる準備段階として極めて重要な位置を占める。折しも、日本看護系大学協議会より「大学における看護技術教育の充実に向けて」が、また、文部科学省より「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会」報告書が出されており、ますます、学内演習の重要性が強調され、各大学への期待とともに責任も大きくなってきている。

学内の演習の目的は、技術の習得を含め、学生に臨床の看護をイメージさせ、考えさせることである。つまり、単なる技術教育および生活指導で構成されているものではなく、ダイナミックに変化する臨床の場やそこでの患者の状況の変化を反映した内容の構成が必要とされる。われわれ成人看護学講座では、平成 16 年度からの大学の実習開始に向け、実習前の学生でも臨床の場や患者の置かれている状況をイメージしやすく、且つ彼らの思考や判断を通じた技術・態度につながるリアリティのある成人看護学演習の構成とそれを支援する教材開発に取り組むことにした。そこで、今回はわれわれの演習の教材開発に役立つ情報を得る目的で、各看護系大学での学内における成人看護学演習の内容や方法についての実態調査を行った。

研究方法

1) 調査対象

平成 14 年 12 月以前に開学した看護系大学 94 大学中、回答のあった 46 大学 (回収率 48.9%)。

日本看護系協議会資料から 94 大学を選択し、成人看護学講座責任者に依頼文とともに調査票を送付した。

2) 調査期間

平成 15 年 1 月～2 月

3) 調査内容

①開学時期 ②教員構成 ③成人看護学演習の状況 (担当学生数, 演習の位置づけ, 演習での事例の使用状況) ④成人看護学演習組み立てにおける限界や問題点 ⑤成人看護学演習で取り上げている項目, これから必要と考えている項目ならびに成人看護学演習で使用しているマルチメディア教材について

あらかじめ、われわれが成人看護学演習として計画している 28 項目 (1 次的救急蘇生法 3 項目, 重症患者の観察とアセスメント 3 項目, 急性期における家族への援助 1 項目, 術前術後の看護 5 項目, 離床の援助 4 項目, 回復期における心臓リハビリテーション 2 項目, 回復期における心疾患患者の患者教育 2 項目, 慢性期における患者への援助 6 項目, ターミナル期における患者援助 2 項目) を上げ、それぞれについて、必要か否か、現在行っているかどうか、担当している学生数および 1 グループあたりの学生数, 担当教員数, 成人看護学演習評価方法, 成人看護学演習でのマルチメディ

ア教材の使用状況について尋ねた。また、われわれがあげなかった項目については各大学の状況を記載してもらった。

4) 調査方法

アンケートによる実態調査（郵送法）

5) 結果の分析方法

数値で表された結果の処理については統計解析処理ソフト SPSS ver.11.0 を用いた。自由記載の項目については、研究者間で検討し、同内容の回答についてはまとめた。

研究結果

1. 開学後の期間

開学後の期間は、1年から35年、平均5年であった。その中でも開学後3～5年以内の大学が46大学中23大学（50%）あった。

2. 成人看護学演習担当教員の構成について

教授、助教授、講師、助手を含め、1大学あたり平均6.6名であった。どの大学でも助手が約半数を占めていたが、9大学（19.5%）では、非常勤講師、臨床看護師、ティーチングアシスタント等を構成メンバーとしていた。

3. 成人看護学演習の状況について

1) 成人看護学演習で対象としている学生数

成人看護学演習で対象としている学生数は、最大120名、最小40名であり、平均74名であった。14大学（31.8%）が80名の学生を対象としていた。

2) 成人看護学演習のカリキュラムについて

17大学（38%）では看護学演習の授業として独立していたが、26大学（58%）では成人看護学の講義の一部として位置づけられていた。

(1) カリキュラム上独立している場合

成人看護学演習の授業として独立している大学のうち、13大学（68%）が1単位、4大学（21%）が2単位で行っており、時間数は平均32時間であった。中には60時間をかけている大学もあった。演習を行っている時期は3年次が15大学（79%）と最も多く、中でも11大学（58%）は前期に行っていた。

(2) 成人看護学の講義の一部として位置づけられている場合

多くの大学では成人看護学演習を2年次から3年次にかけて行っており、2年次25大学（54%）、3年次16大学（34%）であった。講義のうち演習にかけている時間数は20時間から60時間とばらつきが見られていた。

3) 成人看護学演習における事例の使用状況

39大学（89%）では事例を用いており、33校（75%）では演習の一部に用いていた。すべてに事例を用いている大学は6大学（14%）であった。具体的活用状況については、17大学（37%）が成人看護学演習前の看護過程の学習のために、ビデオ教材やペーパーペイシエントの事例を使用していた。

4. 成人看護学演習組み立て、実施上の困難な点および限界など

殆どの大学が現状に問題を抱えていると回答していた。「担当教員の人数が少ない」が33大学（71.7%）、「時間数が足りない」が25大学（54.3%）、また、「教材の数が足りない」、「演習室の数が足りない」、「演習室の面積が狭い」等の問題が多くあげられた。して、それらを解消する手立てとして、「担当教員の人数が少ない」については、臨床看護師やティーチングアシスタントの活用、実習日と演習日を重ねないなどの工夫、「時間数が足りない」については、時間外を使用する、学生の自己学習、必要な演習項目を選択する等、「教材の数が足りない」についてメーカーからのリース、臨床からの借用などで対応していた。

5. 各大学の成人看護学演習の実状

われわれが成人看護学演習の構成として考えている28項目について、その必要性、実施状況、評価方法、メディア教材の使用について回答をもとめた。

1) 成人看護学演習で取りあげる必要のある項目

23校(50%)以上の大学が28項目中21の項目について「必要である」と回答していた。28項目中、「必要である」と回答した割合が50%以下の演習項目は、「家族の面会への援助」、「離床援助中の杖歩行」、「心臓リハビリテーションにおける運動負荷前後の観察」、「心疾患の回復期における生活指導」、「心疾患の回復期における服薬指導」、「ターミナル期における疼痛緩和援助」、「ターミナル期における患者家族への援助」の7項目であった。

2) 実施状況

必要だと回答していても、実施状況はやや低い傾向にあった。また、成人看護学演習として必要性が低いと考えられている項目は、実施状況も低かった。(表1)。

表1 成人看護学演習の必要性と実施状況

演習内容		必要性			実施状況		
		必要	不必要	無回答	実施している	実施していない	無回答
1次的救急蘇生法	気道確保	37	5	4	36	5	5
	人工呼吸	39	4	3	36	5	5
	心臓マッサージ	39	4	3	35	5	6
重症患者の観察とアセスメント	意識レベルの観察	39	1	6	22	16	8
	瞳孔・麻痺・感覚の観察	40	1	5	25	15	6
急性期における家族への援助	家族の面会への援助	17	17	12	21	17	8
術前術後の看護	手術前の呼吸訓練	43	1	2	5	27	14
	手術後の創傷処置	40	3	3	40	4	2
	術後のドレーン管理	39	4	3	31	10	5
	術後のモニター観察	38	3	5	34	9	3
	術後の腸蠕動音の聴取	35	3	8	29	12	5
離床の援助	体位変換	29	6	11	21	15	10
	床上運動訓練	28	7	11	24	13	9
	離床援助・車椅子	30	5	11	20	17	9
	離床援助・杖歩行	23	10	13	16	22	8
回復期における心臓リハビリテーション	運動負荷前後の観察	18	16	12	7	28	11
	心電図測定	29	9	8	21	18	7
回復期における心疾患患者の患者指導	日常生活援助	16	17	13	6	29	11
	服薬指導	16	17	13	4	32	10
慢性期における患者の援助	セルフチェック方法の指導	41	1	4	34	8	4
	自己注射指導	32	9	5	25	17	4
	生活指導	29	7	10	21	17	8
	慢性呼吸不全患者の呼吸音聴取	35	3	8	23	15	8
	慢性呼吸不全患者の肺理学療法	39	3	4	31	12	3
	慢性呼吸不全患者の呼吸法指導	36	5	5	28	13	5
ターミナル期における患者援助	疼痛緩和援助	19	16	11	3	30	13
	ターミナル期の患者家族への援助	18	17	11	3	30	13

3) 成人看護学演習における学生数、担当教員人数

1グループあたり学生数は、平均8~16名であった。また、どの演習も2~4名の教員人数で担当していた。

4) 成人看護学演習の評価方法

すべての項目で、レポート、実技、テストで評価されていた。レポートでの評価は実技やテストよりも多く、実技がレポートよりも多く取り入れられていた項目は、「腸蠕動音の聴取」、「体位変換」、「床上運動訓練」であった。

5) メディア教材の使用

殆どの演習項目でメディア教材が使用されていた。特に多いのは、「1次的救急蘇生法(気道確保、人工呼吸、心臓マッサージ)」、「術前の呼吸訓練」、「呼吸理学療法」であった。メディア教材の内容については、市販または自分たちが作成したものが使用されていた。しかし、自分たちで作成しているという回答は少なく、殆どが市販のメディア教材を使用していた。5大学では、「意識レベルの観察」、「瞳孔の観察」、「急性期の患者の状態の変化の観察」、「手術前の呼吸訓練」、「手術後の創傷処置」、「術後のドレーン管理」の項目で、自分たちで作成したメディア教材を使用していた。

6)われわれがあげた項目以外に必要と考えている成人看護学演習項目

「輸液管理」は5大学で、「輸液ポンプやシリンジポンプの使用法」は4大学で、「ROM評価」
「栄養管理」、口腔内吸引および気管内吸引」は3大学であげていた。

考察

看護基礎教育での技術の充実の必要性が周知されて数年が経過しているが、今回、調査した大学の半数は、創立5年以下のところが多かった。演習においては、教員の人数、演習時間数、設備などが十分に整備されていない状況で行われており、現在は、それら演習の環境を整備する段階にあると考えられた。

半数の大学では、カリキュラム上、成人看護学演習として独立した科目として位置づけられていることから、成人看護学における演習の重要性が認識されたカリキュラム構成がされていることが窺われた。成人看護学演習でメディア教材は殆どの大学で使用されていたが、市販のものを使用している大学が多かった。メディア教材の中でも、ビデオは特に救急蘇生や肺理学療法などの演習で用いられていた。これらは高度な技術を必要とする項目であり、正確な技術の教授の手段としてビデオが適切であると判断されていると考えられた。

また、われわれの計画している演習以外にも演習項目をあげている大学が多く、それらについては、基礎看護学における修得でもよいのではないかと考えられるものもあった。今後、臨床看護の場を彷彿とさせる成人看護学演習の中で本当に必要とされる技術の教授方法を含めた演習項目を厳選していくことが、これから各大学に課せられた使命であると考えられた。

結論

- ①日本の看護系大学46校における成人看護学演習の実態について調査を行った。
- ②現状では、演習に関わる教員の人数、演習時間、設備や器材など、設備面および体制面で十分整備されていない状況で演習が行われていた。
- ③メディア教材については市販のビデオなどを使用している大学が多かった。
- ④今後、成人看護学として確実に教授しなくてはならない演習項目を厳選し、学生が臨床の場をイメージ化できる教材を使用していく必要がある。

参考文献

- 1) 加藤光寶 技術に優れた学生を育成するためにー基礎看護学教育における実習ー。看護教育 1997 ; 38 (11) : 28-32.
- 2) 加藤光寶 成人看護学実習における学内での看護技術演習の効果。新潟県立看護短期大学紀要 1999 ; vol 5 : 123-127.
- 3) 加藤光寶 看護実践力を育てる技術教育の試み・看護過程の学内演習の展開。看護教育 1998 ; 39(5) : 402-407.
- 4) 太田和美 成人看護学実習における学内シミュレーションを取り入れた技術練習の効果。新潟県立看護短期大学紀要 2000 ; vol 6 : 113 - 201.
- 5) 村島さい子 実習生の経験と向き合う臨床実習教育。看護教育 2001 ; 42(2) : 94-98.
- 6) 舟島なをみ 看護教育学研究の成果に見る看護学実習の現状と課題。Quality Nursing 2000 ; 7(3) : 202 -207.
- 7) 佐藤まゆみ 成人看護学実習における現状と課題ー周手術期患者の看護実習よりー。Quality Nursing 2001 ; 7(3) : 243-246.
- 8) Quality Nursing 編集 特集・看護実践能力を高めるための臨地実習前の準備教育。Quality Nursing 2002 ; 8(10) : 3-56.
- 9) 山崎美恵子 平成12年度「看護系大学の学内演習・臨地実習に関する調査」報告書。日本看護系大学協議会 平成12年度事業活動報告書 2001 ; 7-34.
- 10) 文部科学省高等教育局 「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書」2003.